

あばれ天竜にまつわる

おはなしマップ



- ★ あばれ天竜にまつわるおはなし・・・1～9ページ
- 関連する施設・・・10ページ



ふうえつざん
風越山

野底川

●天竜川のおはなし

天竜川は、昔から大雨が降ると川筋が変わるほどに氾濫したので、「あばれ天竜」といって恐れられていました。また、伝説も多く残されています。

むかし南の海に住んでいた大きな竜は、暴れんぼうで気性が荒く、仏様に天の果へと追いやられてしましました。竜は、天に昇ってからも雲や風をけちらし、強そうにそびえるハケ岳にけんかをしかけました。ぐるぐると山に巻きつき締めつけたので、こらえきれなくなったハケ岳はどかんと噴火しました。

その勢いで竜は吹き飛ばされ、伊那の山々の間にどっさりと落ちました。その跡に川が流れ、天竜川と呼ばれるようになったといわれています。

むかしのおはなしは、川がときに恐ろしい姿に変わり、襲いかかってくることを教えてくれています。

飯田市

高森町歴史
民俗資料館
10ページ

元善光寺

高森町

松川町役場

松川町

りへえ
理兵衛堤防
1~2ページ



中川村歴史
民俗資料館
10ページ

いしかわよけ
石川除
8ページ

高森町役場

ださら
出砂原の大石
4ページ

大島城跡

あま
天の中川橋

まきがはらばし
牧ヶ原橋

あじまばし
阿島橋

いちだ

そうべえ
惣兵衛堤防
5~6ページ

大島城跡

みやがせばし
宮ヶ瀬橋

天竜橋

あしがみ
石神の松
3ページ

中川村

喬木村
役場

伴野堤防
7ページ

あひな
明神橋

豊丘村

万年橋

たいじょうばし
台城橋

間沢川

小笠川

こしが
小笠ダム

中川村役場

加賀須川

豊丘村役場

豊丘村

万年橋

たいじょうばし
台城橋

間沢川

小笠川

こしが
小笠ダム

中川村役場

加賀須川

豊丘村役場

豊丘村

万年橋

たいじょうばし
台城橋

間沢川

小笠川

こしが
小笠ダム

中川村役場

★ 理兵衛堤防 (中川村片桐) かたぎり

理兵衛堤防が築かれた地（前沢川と天竜川の合流地点）は、やわらかく堆積した扇状地を山地から流れ出る支流が短期間で深くけずりとして谷となる田切地形をなしています。雨が降ると付近一帯の雨水が前沢川に集中して氾濫や土石流を引き起こし、あばれ天竜の濁流とともに、心血を注いで開墾した田畑や人々に襲いかかってきました。やむなく土地を離れる人々もいたほど災害による大打撃を受けながらも、人々は幾多の困難を乗り越え、生活を守るために水との闘いを繰り返してきました。



現在の河床は、この位置まで上がっています。

▲天の中川橋下流側に残る理兵衛堤防の一部。昭和58年の災害で洗掘され、中段部が姿を現しました。

●理兵衛堤防とは



▲松村理兵衛忠欣

前沢村の商人百姓（大地主）であった松村家は、1千石のお米がとれたという田島たんぼの約2割を所有していました。未曾有の災害と伝えられている正徳五年（1715）の未満水の時、村は荒廃し、理兵衛忠欣は築堤を決意したといわれています。そして、寛延三年（1750）に川除普請（堤防工事）を幕府に願い出て、大石積の大工事を始めました。工事は、冬と春の農閑期における百姓の稼ぎになるように進められ、明和八年（1771）に至るまでに5回の修理をしながら始め30間、後に100間の堤防を築いたといわれています。翌年から文化五年（1808）に至るまでの工事は、度重なる無常な災害の大打撃を受けながらも子の常邑、孫の忠良へと引き継がれ、この間に造られた堤防を「理兵衛堤防」と称しています。堤防の工事費用は、忠欣が行った寛延三年から文化五年までを含めると3万2千両（江戸中期の平均米価1両＝約4万円で換算するとおよそ12億8千万円に相当）に及び、関わった人足は計57万6千11人といわれ、莫大な私財を投じて造られました。

その後も文政十一年（1828）の洪水で大きな被害を受けており、代々堤防の復旧を行っている記録が残されています。また、前沢川の合流部付近にも堤防が造られており、今もその姿を見ることができます。

●理兵衛堤防に関する略年表

西暦	年号	事項
1635	寛永十二年	・水害による大被害を受け、理兵衛の祖先（忠興）は土地を離れ七窪に移住。数十年後、現在の中川村田島に戻り、荒廃した耕地の復旧・開拓に努める。
1715	正徳五年	・正徳五年の未満水 ・理兵衛忠欣の養父（忠範）が私財を投げ打って飢えに苦しむ村人を救済し、貧困に陥いる。
1750	寛延三年	・理兵衛忠欣が遺産の一部を処分したり、新しく酒造の業を始めるなどして傾いた家運を挽回し、築堤を幕府に願い出て、大石積の大工事を始める。
1756	宝暦六年	・大満水にて前に築いた堤防がすべて流される。
1765	明和二年	・大満水にて堤防欠損。
1771	明和八年	・寛延三年より21か年の間に5度の築堤工事を実施、大石積三十間及び前沢川渡下より田島前青島山に至る長さ百間の堤防を築く。（詳細不明）
1772	安永元年	・現存する理兵衛堤防の工事を始める。 （大石積長さ百間・高さ四間半・馬踏二間半）
1778	安永七年	・大満水にて欠崩れ、二度の工事を始める。
1789	寛政元年	・六月十七日、十八日の大満水にて堤防のほとんどが押し崩される。 ・理兵衛常邑が幕府に急破普請を願い出て工事を始める。
1792	寛政四年	・七月十三日の大満水にて前沢川の出水が激しく天竜川との合流部で欠け崩れる。 ・急破普請を願い出て工事を続ける。 ・堤防防護のための柳木並木の植え付け完了。
1808	文化五年	・前年から二年続いた大満水にて欠け崩れる。 ・理兵衛忠良が急破普請を願い出て工事を始める。 ・この工事によって完成された堤防が現在残っている理兵衛堤防である。

1 参考文献＞「中川村誌 中巻」（平成18年3月）編集：中川村誌編纂刊行委員会 発行：中川村
「理兵衛堤防」（平成13年3月30日）著者：下平元護 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所調査課



▲理兵衛堤防の絵図 (松村家所蔵、作成時不明、右二134絵図彩色)

●理兵衛堤防の特徴

堤防を守るために水の勢いを緩めたり、流れの方向を変えたりする「^は刎^ね」を水のある場所に石積で造り、水の流れが対岸へ行くように設置されています。堤防に使われた石は、前沢川の上流域から運ばれた市田花崗岩^{いちだかこうがん}で、大きな石を切り出して堤防の表側に積み上げるとともに、裏側にも置いて、洪水によって壊れることを防ぐようにしてあります。

●平成18年7月豪雨災害で姿を現した上流部

平成18年7月豪雨災害の時、天の中川橋上流部のコンクリート護岸が洗掘されて決壊し、理兵衛堤防の上流部側およそ80mが姿を現しました。

また、堤防の河川側中段に沿って71mの石の部分(40m)と木の部分(31m)からなる灌漑用水路^{かんがい}が発見されました。現在は、復旧工事の終了後に埋め戻し保存がなされ、木樋の一部が中川村歴史民俗資料館に保存されています。



▲姿を現した堤防の上流部



▲発見された水路

●あばれ天竜に挑んだ理兵衛忠欣

文化十二年(1815)忠欣の33回忌に当りその孫の忠良は京都吉田神祇宮に請うて祖父の神号(天流功業義公明神)を授かりました。

これを記念して石碑が建立され、水神や九すりゅうび頭竜碑とともに今も祀られています。

(三十年のあゆみより)



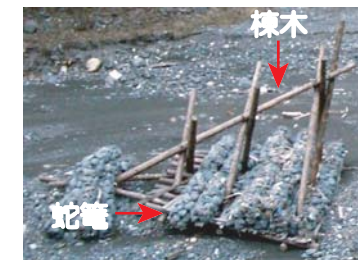
▲理兵衛を祀った石碑



●「^{ひじりうし}聖牛^{じやかこ}」とは

組み上げた丸太を蛇籠などを載せて川底にすえつけ、川の急な流れを抑える水制工法で武田信玄が考案したといわれています。棟木の長さによって中聖牛・大聖牛・大々聖牛などと呼ばれています。子の常邑は、寛政元年

(1789)六月の大満水における復旧工事の際、大々聖牛を用いてみ切り大石積を施して堤防を完成させました。大々聖牛は大木が必要で費用がかかることから、これをやる所は少なかったようです。



—メモ—

- 長さの尺度：100間(けん) ≒ 182m
- 貨幣価値：江戸中期の平均米価で換算すると1両 ≒ 約4万円で算定



★2 いし がみ おおくさ 石神の松 (中川村大草)

石上の松には、洪水にまつわる伝説が残されています。三共地区の人々は、毎年3月からお盆前まで松の消毒や草刈などの手入れを行っています。また仲林地区の人々は、毎年伝説にまつわる祠の前で集まり、和尚さんと呼んで「行者様のお祭り」を盛大に行っています。

今でも石上の松は、地域の人々の信仰の対象になっており、伝説と共に洪水の史実が伝えられています。



▲石神の松、中川村の指定天然記念物になっています。

●水難除けの祈禱をした行者様



げんな
元和の頃（1615年～1624年）、法力のすこぶる顕
著な山伏（仏道修行のために山野に起臥する僧）が常泉
寺に寄寓していました。

時を同じくして天竜川は、洪水による氾濫をしきりに
起こしていました。困り果てた農民たちは、常泉寺に寄
寓していた行者（山伏）を頼り、水難除けの祈禱をして

▲祠の中の行者様 もらいました。

行者は熱心にお経を唱えながら
21日間の祈禱を続け、満願の日にと
うとう精魂尽きて倒れてしまいま
した。

このとき死に先立ち、手植えの
松を水神に手向けたのが今に残る
「石上の松」だと伝えられていま
す。遺骸が葬られた祠は、「山伏
塚」とも呼ばれ、今も地域の人々
から「行者様」といって崇められ
ています。



▲行者様が祀られている祠、石神の松を
見守るように鎮座しています。

●釜淵の主

石神の松の下を流れる天竜川の淵は、釜淵と呼ばれています。
そこには、主の大きな鯉が棲んでいて、九頭竜の化身であるといわれ
ていました。ところが、ある年の洪水で主の鯉は、淵の外に跳ねでて
渴いて死んでしまいました。里人がその鯉の死骸を今の石神の地に手
厚く葬り、塚を築いて水神として祀ったとも伝えられています。

—メモ—

●中川村三共地区には、天竜川にまつわる伝説・信仰が今も根づいています。





だ さ ら

出砂原の大石 (高森町下市田出砂原)

たくさんの雨は山を崩し、土砂と共に大きな石が火花を散らしながら泥流となって川を流れくんだり、一瞬にして泥だらけの扇状地を形成します。

JR市田駅近くに残る大石は、伊那谷で未曾有の大災害と語り伝えられている「正徳五年の未満水」の時に大島川の上流から流れてきたものだといわれています。大石の上には大小二体のお地蔵様が祀られています。

出砂原の大石は、私たちが暮らしている土地に起こった大地変の史実と災害を経験した人々からのメッセージを今に伝えてくれています。

●未曾有の大災害「正徳五年の未満水」

正徳五年乙未年（1715）六月、月初めから雨が降り続いていました。

十八日の夜明け方から、雨はたらいをぶちまけたようななどしゃ降りとなり、膝を並べて話す声が聞こえない程でした。大島川上流の不動滝近くのかぎかけという高い山が崩れ上流部を堰き止め、前の沢の下・わる沢ととこなみ沢の間に天然ダムができました。そして漫々と水がたまった天然ダムの一角が決潰し、天地も崩れるばかりの大音響と共に赤土色の濁流が押し出し、川幅は数十間の広さとなって押し流してしまいました。吉田川原から天竜川へ注ぐ所では、押し出された多量の泥水のため、一時天竜川も堰き止められ、海のようにになりました。そのため、天竜の水は逆流し、一旦流されてきた5尺の酒桶や土蔵の土台が竜の口まで戻っていったと伝えられています。（高森町史上巻後編より）



▲前亡後死三界万霊塔

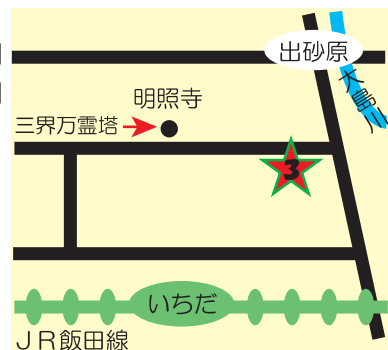
安養寺の住職であった了溪禅師が、溺死した人々の霊を弔い、冥福を祈るために建立したといわれる「前亡後死三界万霊塔」が、出砂原の明照寺前に今も残されています。

●出砂原地名が教えてくれること

「出砂原」という地名は、正徳五年の未満水をはじめ、大島川の氾濫によってできた土石流扇状地につけられた地名です。松崎岩夫氏によるとその由来は、「土砂が流れくだった来た処（“だ”の発音は“落ちる”という意味、“さ”の原形は“しゃ”、“ら”はあちら・こちらにみられる場所を示す）」と考えられています。昔の人々が私たちへ、土地に対する注意を促してくれているように思えます。

—メモ—

●天竜川流域には「出砂原」以外にも、「水神町」「田島」「青島」「荒井」「生田」「百間枳」「わる沢」など洪水や土砂災害にまつわる地名が多く残されています。



▲出砂原の大石

★^{そう} ^{べえ} 惣兵衛堤防（高森町下市田）

惣兵衛堤防（^{おおかわけ}下市田村大川除）は、突きあたるあばれ天竜の水勢を刎ね返し、^{かみさと}下市田・座光寺・上郷に250町歩という美田をもたらし、江戸時代より200年あまりに渡って人々の生活を守り抜いてきました。

昭和36年に伊那谷を襲った^{さんろく}三六災害の時、人々の懸命な水防活動の最中無念にも流失してしまいましたが、惣兵衛堤防の恩恵は立派な大石積の姿が見られなくなった今日に至ってもなお、度重なる水害から堤防を保護し続けてきた人々によって語り継がれています。



▲ありし日の惣兵衛堤防
（高森町歴史民俗資料館所蔵）

●惣兵衛堤防とは

惣兵衛堤防が造られた地は、古くより鍋弦堤という堤防がありましたが、洪水の度に押し流され荒地となっていました。退廃していた飯田藩の藩政^{さっしん}刷新に力を入れた堀親長侯が^{ほりちなが}12歳の時、^{くろすくすうえもん}重臣黒須楠右衛門の献策によりこの地に堅固な堤防を築き、天竜川の水を引き入れる灌漑用水を建設して新田を開発し、藩の財政を豊かにする計画を立てました。

工事の主任技師には、現在の飯田通り町で「吉田屋」とい^{いしく}石工をしていた中村惣兵衛が命じられました。飯田で惣兵衛が造った堤防はどれも堅固な出来であると定評があり、75歳齢にもかかわらず起用されたのです。



▲惣兵衛堤防に使われた大石 ^{かんえん}寛延三年（1750）に工事が始まり、惣兵衛は非常に熱意と熟練した土木技術をかけて築堤に専念しました。石積に使う高さ^{しゆく}4尺内外（1尺=30.3cm）の大石は、^{だいじほら}台持洞より約500m下方の堤防まで竹を敷いた道の上を大勢の人々が木遣音頭で引き寄せました。そして宝暦二年（1752）二月、大石を乱れ積にした全長81間の一大岩壁が完成しました。

惣兵衛堤防で刎ね返したあばれ天竜の激流は、対岸の村々にとっては脅威であり恨みを持った惣兵衛は、一時飯田の松尾に隠れていましたが、堀侯から^{しものおか}下殿岡（現在の飯田市伊賀良）に土地を^{いがら}与えられ、87歳で没するまで余生を送りました。

●築堤の測量基準点

惣兵衛堤防の築堤にあたり、領主堀侯の紋章にちなんだ^{まっこう}亀甲に「上」の文字を刻みつけた「^{まっこういし}亀甲石」と呼ばれる2つの大石と、今はなき^{てんぱくもり}天伯森の祠と畑の中にあつた供養塚が測量の基準点として用いられました。



▲上の亀甲石、用水の
取入口付近の位置を
決定する基準点



▲下の亀甲石、土地の境
界堤防等の距離をだす
基準点

●惣兵衛の偉業を偲ぶ石碑



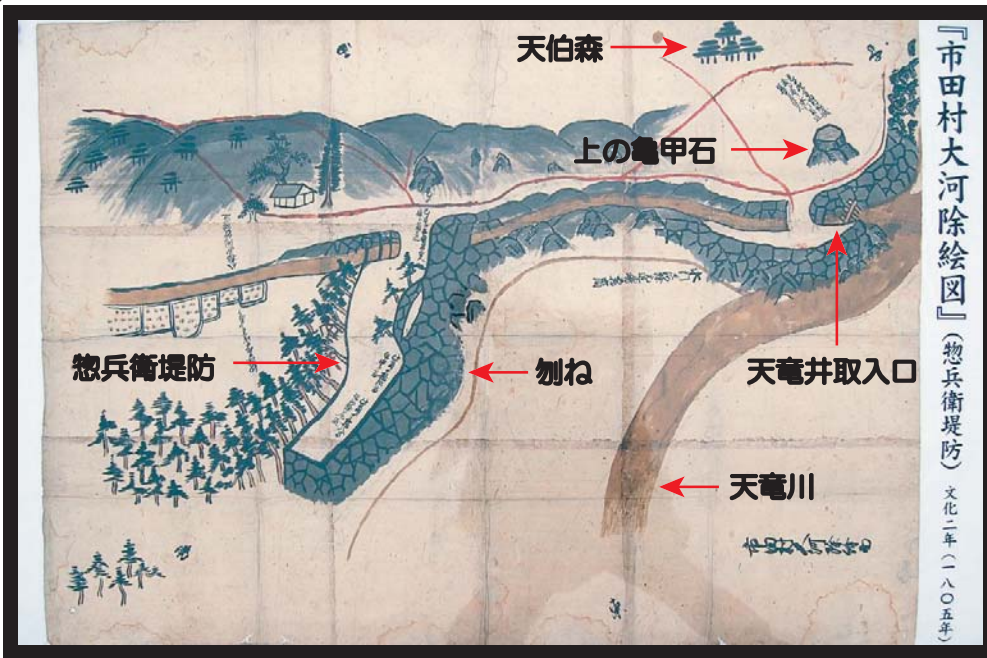
▲嘉永の水天宮



▲惣兵衛の供養碑

惣兵衛堤防完成から約100年後の^{かえい}嘉永三年（1850）に惣兵衛の偉業を^{すい}偲び水天宮が建立されました。三六災害で流失してしまいましたが、奇跡的に平成5年（1993）の親水公園造成中に河床から見つかりました。

嘉永七年（1854）には、郷中総意で惣兵衛の菩薩を^{ぼさつ}吊った供養碑が建立されました。



▲市田村大河除絵図（高森町歴史民俗資料館所蔵）に加筆して引用

●惣兵衛堤防の特徴と大井

惣兵衛堤防は、明神橋のたもとから西南へ230間（直線距離）の地点より始まり、岸に沿って弧を描き、尾端へいくほど狭まった形状をしていました。堤防の中央と尾端には、「勿ね」と呼ばれる出っ張りが設けてあり、水を勿ね返すのに役立ちました。

また、築堤とあわせて大井（天竜井とも間夫井ともいう）と呼ばれた用水路の建設が行われ、明神橋のたもとから50間ほど上手に灌漑用水の取入口が設けられました。この大井の完成により、飯田市座光寺をへて上郷別符までの河原が美田へと変わり、巨額な石高を得るにいたりました。

惣兵衛堤防と大井の管理は、堤防より西の方角に設けられた「御小屋地」に飯田藩から普請掛かりが出張して復旧工事の監督をしたり、井番がつめて大井の水門調節を行い、村では川除世話係というものゝ堤防事務に関する処理を行っていたといわれています。

参考文献＞「惣兵衛川除」（平成3年3月15日）著者：市村威人、市村栄人 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所
「天竜川上流工事事務所 三十年のあゆみ」（昭和55年3月）編集：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所 発行：（社）中部建設協会



●語り部に聞く 惣兵衛堤防流失の時

水防活動では各々が、自分の家の庭木を全部切って木流しをして一生懸命やっておったんですよ。そうしておいたらね、4時ごろにリーダーが「もうこっちへ避難せよ」「流れが弱くなるとおれたちのところへぶつかってくる」と言うんですよ。

それで見えおたら急にね、竜が川の面にわーっと出てくるような感じ、それは濁流が、川の一番の中心部の部分が盛り上がってきたんですよ。たちまち惣兵衛堤防の上を水が乗り越えてきたんですよ。後ろは弱いですからだんだん侵食されていって、やがて。

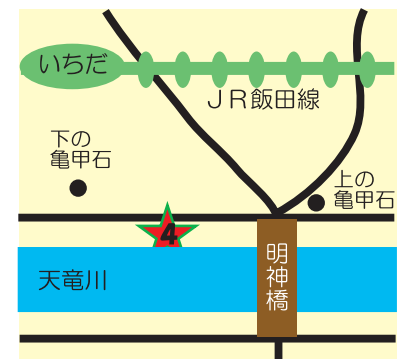
（惣兵衛堤防に使った）石は全部オジマガハラ（Ojimagahara）の土石流の石を使ったんだよね。だから、私たちが住んでいる場所は、祖先がそういうところを開拓して住めるようにして何百年かたっているわけですから、これは成り行きというか自然の摂理というか、そういうものの姿を見ておるんだということで、それはしっかりと目に焼きついているんです。（高森町在住M.Kさん）



▲惣兵衛堤防決壊を見守る人々（三十年のあゆみより）

—メモ—

●昔の土木工事では、亀甲石や要石が基準となる石として利用されていました。



★5 とも の 伴野堤防（豊丘村伴野）



▲紙芝居「開墾堤防」

美濃高須藩が治める神稲村伴野の地は、対岸にできた惣兵衛堤防の刎ね返しをまともに受け、賽の河原の石積に等しい荒地と化していました。江戸より帰郷した松尾千振は、郷土復興のために堤防を造り開墾する計画を力説し、その熱意は希望を失っていた村人の心を動かしました。明治16年に「開墾組」が創設され、幾多の困難を鉄の団結力で乗り越え、築堤開田の事業を成功させたのです。



▲昭和30年頃の伴野堤防（右）と天竜川（豊丘村誌 下巻より）

●伴野堤防とは



▲松尾千振

万延元年（1860）の洪水による伴野新田の流失は三六災害を凌ぐものとなり、明治初期に連続して洪水に見舞われた村の疲弊は極みに達していました。松尾千振が率いる「開墾組」は33名の有志で構成され、荒地の所有者から無代無償収獲にて土地を借りて開田し、その収穫物を財源として築堤し、25年後に立派な水田にしてから返還するという大事業を始めました。明治19年（1886）5月の洪水によりこれまで築いた堤防のほとんどが流されましたが、開墾組からは一名の脱退者もなく再建に向いました。

明治25年2月16日、松尾千振は堤防の完成を待たずして39歳という若さで他界してしまいました。開墾組は暗闇に光明を失いましたが、松尾千振の志を絶やすことなく更に団結し事業を進めました。度々見舞われる水害にめげることなく、明治39年（1906）に堤防の大筋が完成し、内堤も美田へと姿を変え、明治42年（1909）に土地所有者への返還が行われました。

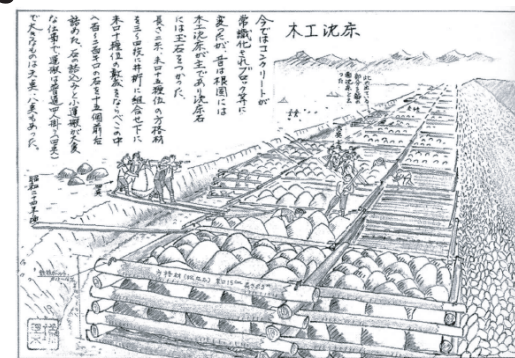
伴野堤防は、三六災害でほとんど流失し、現在は復興事業によって近代的な堤防が建設されています。



▲開墾組の功績を伝える開墾組彰功碑

●「木工沈床」とは

材木を方格に組んだ枠の中に玉石をつめて護岸の前面に沈設し堤防の根固めをする工法です。豊丘村誌によれば、粗朶沈床が天竜川の急流に適さなかったため、伴野堤防の工事指導に関わった飯田土木出張所主任の小西竜之助が、新たに木工沈床を考案したと伝えられています。



▲昭和24年頃の木工沈床による護岸工事のようす（三十年のあゆみより）

—メモ—

●伴野地区には、開墾の碑以外にも三六災害復興記念の碑や松尾千振の偉業を讃えた碑が残されています。



★6 いし かわ よけ ざこうじ 石川除 (飯田市座光寺)

南大島川と土曾川に挟まれた天竜川沿いの川原地帯は、洪水の度に水がつくとこ所でした。石川除の周辺は、昔の殿様が釣りをした場所であると伝えられている塚が残っており、昔は天竜川の川筋だったと思われます。江戸時代になると市田村出砂原にできた惣兵衛堤防の刎ね返しに対抗し、対岸の伴野村に強固な堤防ができ、そこに突き当たった激流がまた対岸の座光寺村大島川渡を直撃するようになりました。

そこで、村の頭分は知恵を出し合い資金を集め、飯田藩に石川除の建設を願い出て、両者折半のもとに石積の堤防が築られました。



▲現存する石川除

●石川除とは

大島川渡への強固な堤防建設を願う村人の熱意により、216両2朱の資金が集まりました。飯田藩への石川除建設願いが聞き届けられ、文政十一年(1828)から3年間をかけて総延長128間5尺、堤防の北に大井の水門が設けられた石川除が完成しました。

その後、度々襲ってくる水害と闘いながら何度も修復がされ、現存する石川除は、明治元年(1868)に嵩上げ工事を施した時の姿をしています。

三六災害(1961)の時、惣兵衛堤防決壊の報が伝わって間もなく、あばれ天竜の濁流が一拳に南下してきましたが、石川除とその先に続く水神堤防副堤によって遮断され、かすみ口のところでは一時湛水し、その後天竜川へと放流されました。先人が苦心を重ねて築き上げた石川除の恩恵がいかに大きかったということが思い起こされます。



▲南大島川と天竜川の合流部



▲座光寺治水区の歴史を伝える治水碑と石川除水神

●川原新田の開発に尽力した北原米太郎

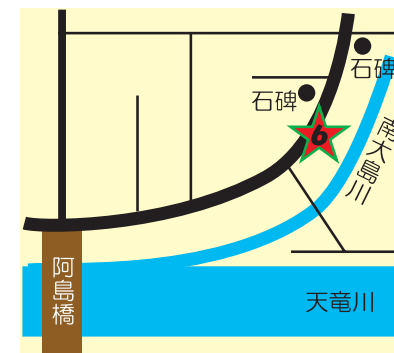
明治の頃、中羽場にいた寺地の当主北原米太郎氏は荒地になっていた石川除周辺の開墾に着目しました。同志を募り、明治24年より十数年を要して新田開発に尽くしました。その功績を讃えて「北原氏墾田碑」が石川除の西北隅に立てられています。



▲川原開墾記念碑

—メモ—

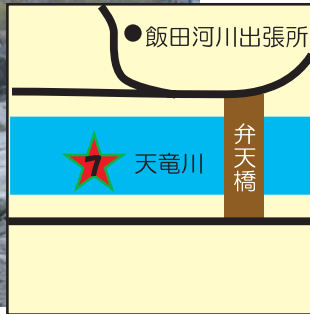
●今もひっそりとたたずんでいる石積からは、江戸時代の立派な施工技術を確認することができます。



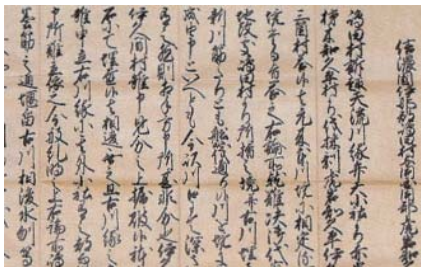
★^{べんてん}弁天の大岡さばき（飯田市松尾）



▲弁天橋下流の中洲にある弁天岩



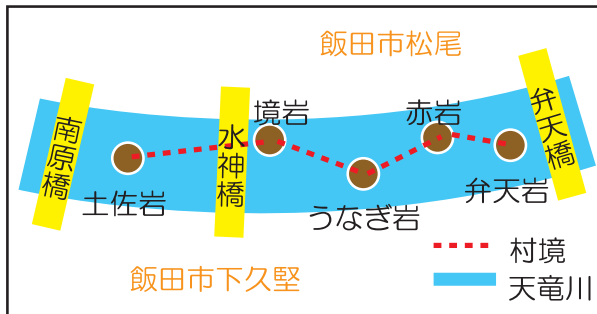
●洪水がもたらした境界争い



▲弁天の大岡さばき文（一部抜粋）

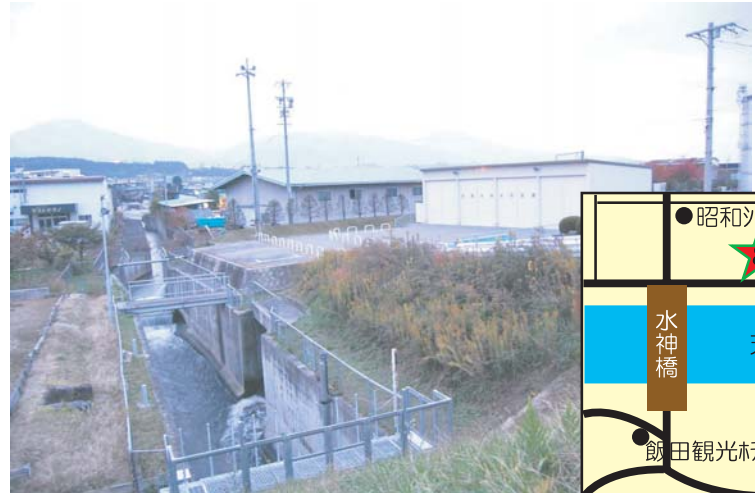
^{げんしん}元文三年（1738）の洪水で天竜川の流が西寄りになり、島田村（現飯田市松尾）と対岸の虎岩村・知久平村（現飯田市下久堅）との間で境界争いが起こりました。

島田村は江戸幕府の奉行所へ訴え、大岡越前守らによる審理が始まりました。島田村の村入用帳に「弁天宮建替費用」とあるのが証拠となり、弁天岩に祀られた弁天社は東を向いたまま島田村のものとなり、岩を結ぶ線が村境とされました。

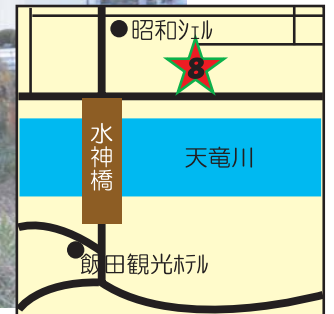


▲さばきのあとの境界

★⁸飯田市松尾地区



▲松尾地区の水防施設



▼排水ポンプ車の活動状況



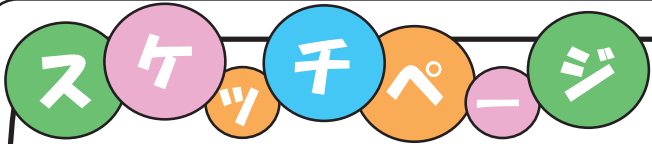
●平成18年7月豪雨災害の時

飯田市松尾地区の水神橋のたもと周辺は、36災害58災害など過去に何度も水害に見舞われている地域です。平成18年7月豪雨災害においても冠水し、排水ポンプ車による支援活動が行われました。

●語り部に聞く 昭和36年災害の様子

天竜川沿いにあった工場の家が、水がついてくることによって浮きまして、徐々に本流の方へ導かれて、天竜川にかかっております水神橋に激突してこっぴみじんになるという状況を見て、「これは恐ろしい」という感覚を受けました。災害後は、今でいうボランティアとして泥だしを行い先生ともども出かけました。災害を経験して思ったことは、「まずは人命」という形の中で、避難体制を準備しなくてはいけないこと、行政だけでなく住民の皆さんも巻き込んでそういう意識をいかにして持ち続けていくかが大事で、今後やっていかななくてはいけないところです。

（飯田市勤務H.Kさん）



おかしから語り継がれてきた災害のおはなしには、災害から身を守る知恵や「二度と悲しい思いをしてほしくない」という人々の願いが込められているよ！もっとくわしく知ってみよう！



学習施設

※詳しくは、各施設へお問い合わせください。

- **中川村歴史民俗資料館**
〒399-3802 長野県上伊那郡中川村片桐4757番地
TEL : 0265-88-1005 有線 : 88-1005 (中川村教育委員会)
(http://www.vill.nakagawa.nagano.jp/old_site/kankou/menu/rekisi/index.html)
- **高森町歴史民俗資料館**
〒399-3103 長野県下伊那郡高森町下市田2243
TEL : 0265-35-7083
(<http://www.town.takamori.nagano.jp/tokinoeki/index.htm>)
- **天竜川総合学習館かわらんべ**
〒399-2431 長野県飯田市川路7674
TEL : 0265-27-6115
(<http://www.tenjo.go.jp/kawaranbe/>)

お願い

「天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会」では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集・整理し、そこから得た災害教訓を活かして地域の防災力向上に役立てていく試みに取り組んでいます。この資料を広く活用していただきながら、地域に現存する防災資源を再発見し、水害や災害に備える力を高めていただけたらと思います。貴重な資料、ご意見などございましたら下記連絡先にお知らせください。

<連絡先> 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
担当：調査課（電話：0265-81-6415）

<編集> 日本工営株式会社 防災マネジメント室

※本誌の記事・写真・図表の無断転載は堅く禁じます。